



2013年2月13日放送

漢方頻用処方解説 薏苡仁湯

東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科 三浦 於菟

薏苡仁湯について解説をいたします。薏苡仁湯は主に“痺証”に使用される方剤です。この“痺証”といいますのは、“痺れる”という字とあかしの“証”と書きます。ですが、シビレという意味ではありません。痺とは閉じるという意味で、寒さや湿気などによって、気血の運行が妨げられ、関節や筋肉の疼痛・腫脹・しびれ・運動障害などが出現した疾病を言います。

【出典】

さて薏苡仁湯ですが、中国明代の皇甫中の『明医指掌』を出典とする方剤で、その条文には、「寒湿痺痛は薏苡仁湯」と書かれています。寒湿とは寒さと湿気のこと、本剤は寒証と湿証による疼痛性の痺証に使用されることがわかります。寒証の痺証とは、四肢の冷感、寒冷刺激で悪化する、温暖を好む、白苔などの寒さを連想させる症状がみられる痺証を言います。湿証の痺証ですが、湿気で悪化、浮腫、舌苔が庭の苔のように隙間なく生えている膩苔などの湿を連想させる症状がみられる痺証を言います。

さらに、清代の呉儀洛の『成方切用』には、「痺、手足に在りて、湿、関節に流れるを治す。並びに手足、流注し疼痛、麻木不仁、以て屈伸し難きを治す」と、湿つまり湿気と流注の痺証を治療すると書かれています。

“流注”とは難しい言葉ですが、流行の流、つまり“流れる”と注射の“注”と書きます。注とは一箇所に留まる意味で、流注とはある疾病の結果、湿などの毒邪が血液の流れ

によって運ばれ、筋肉深部や関節などに留まる病態を言います。流注は初期ではなく慢性期や、留まるために固定的な症状が出現しやすくなります。

薏苡仁湯条文の流注とは、湿邪が関節や筋肉に留まった結果、筋肉の結節やしこり、筋肉関節痛、関節腫大、さらに“屈伸し難きを治す”とあるように、関節や筋肉が流暢に動かない運動障害などの症状を指しています。また“麻木不仁”とは、しびれや知覚鈍麻の意味です。このような症状に、薏苡仁湯は使用されるわけです。

【構成生薬】

次に構成生薬からさらに適応症状を検討していきます。薏苡仁湯は、薏苡仁、蒼朮、当帰、芍薬、麻黄、桂皮、甘草の七味から構成されています。

先の『成方切用』には、「薏苡仁為君。筋を舒め湿を除く。其力、和にして緩」と書かれています。方剂名が示すように、生薬の薏苡仁が君薬となります。君薬とは、方剂の中心となるリーダー的な最も重要な生薬で、方剂の働きを決定づけるものです。言い換えれば、君薬を理解することが、方剂の効能の理解につながるわけです。

そこで薏苡仁ですが、イネ科ハトムギの種子で鳩のえさなどによく使用され食品でもあります。その働きは、体内に停滞した病的水分である湿邪つまり湿気を排尿などにより除くことで、硬直した筋や関節を緩めたり関節や筋肉痛を緩和する働きがあります。その他、皮膚化膿症、下痢、食欲不振、帯下などにも使用され、“和にして緩”とありますように、体に優しい穏やかな作用を持つ薬です。これより、薏苡仁湯もまた比較的温和であることが理解されます。また“ヨクイニン”は単独で、疣贅つまりイボにもよく使用されます。ちなみに、漢方方剂である薏苡仁湯と単独の薏苡仁、これらを間違えて処方することもまれにみられますので、注意が必要となります。

以上のように、薏苡仁という生薬は筋肉の湿邪を取る作用に優れており、これより薏苡仁湯は湿気を取り除く作用に優れていることがわかります。条文にある“難以屈伸や関節不利”、つまり関節や筋肉が流暢に動かないという症状は、この湿邪が中心となって引き起こされたものであり、そのために薏苡仁が使用されていると考えられます。とすれば、筋肉痛・コリなど筋の症状がより適応となると考えられます。

さらに注目すべきは、薏苡仁は芍薬と同様に微寒、つまり軽度に体を冷やす働きがあることです。これより薏苡仁湯には軽く熱を冷ます効能もあることがわかります。としますと、本剤は寒さと湿気に加えて、関節や筋肉の軽度熱感、体のほてり、冷水を好むなどの軽度の熱症状を伴っている“痺証”が適応となると言えます。

他の構成生薬ですが、当帰と芍薬は体を滋養し血を巡らせて痛みを止める。麻黄と桂皮は温め冷えを除く。甘草は他の薬物作用を調和させ、芍薬と共に疼痛を緩和するなどの働きがあります。

そこで薏苡仁湯の適応病態と症状をまとめてみます。本剤は、寒証、湿証、軽度熱証の3つの症状がみられる痺証、特に湿証が中心の病態が適応となると言えます。

すなわち①関節や筋肉痛、関節腫脹、しびれ、関節や筋肉の強ばり、関節の運動軽度障害などの痺証症状。特に筋肉症状によく使用されます。ただ非常に強い疼痛には向かないように思います。②湿気で悪化、軽度浮腫、膩苔などの湿証の症状。③四肢冷感、白苔、寒冷刺激で悪化、温暖を好むなどの寒証症状。④関節の軽度の熱感や体のほてり、淡い色の黄苔などの軽度の熱証症状。⑤さらに初期ではなく、慢性化し固定限局性の痺証にも多用されます。

適応疾患としては、筋肉痛、関節炎、関節リウマチ、変形性関節症、肩関節周囲炎、頸腕症候群などの筋関節疾患に多用されますが、その他湿疹、アレルギー性鼻炎などにも応用可能と言えます。

【鑑別処方】

①桂枝芍薬知母湯は、共に熱証がある寒性の痺証に使用されます。ですが、薏苡仁湯より熱感などの熱証や冷えなどの寒証が共に強い病態に使用されます。しかし、浮腫・筋のこわばり・運動障害などの湿証は、より弱い病態が適応となります。

②麻杏薏甘湯は、共に筋肉痛があり、寒証と湿証と軽度熱証があります。ですが、より急性で、浮腫などが主症状であり、熱証と疼痛はより軽度な病態に使用されます。

③越婢加朮湯は、熱証と浮腫などの湿証症候が類似しています。ですが、顔面や眼瞼などの上部の腫脹発赤浮腫などに主に使用され、より熱感が強い病態に使用されます。寒証は弱いかみられません。

④桂枝加朮附湯は、関節や筋肉の疼痛腫脹、冷感などの寒湿症状が類似しています。ですが、熱証はなく、冷感などの寒証や疼痛が強い病態に使用されます。

⑤防己黄耆湯は、浮腫や冷感、関節腫大などの寒湿症状が類似しています。ですが、浮腫、体の重だるさ、肥満傾向などの湿証症状と膝などの関節痛、易感冒、汗をかきやすい、冷えなどの体表症状が中心的な症状で、熱証はみられません。

⑥疎経活血湯は、寒証と湿証の痺証に使用されることが類似しています。ですが、関節の熱感や弱くなく、寒証は強くありません。さらに軽度の瘀血を伴ったり、全身的な痺証に使用されます。

⑦大防風湯は、関節痛と寒証が類似していますが、虚証で慢性期の痺証に使用されます。

【症例検討】

薏苡仁湯の症例を検討いたします。

症例は、49歳の女性の方です。

元来冷え症でむくみやすく、感冒となりやすい体質でした。約1年前より背部の疼痛としびれ感が出現し、9月に来院されました。

初診時の訴えですが、肩こりがとても強く、悪化すると背部の痛みとしびれが出現するとのこと。また下肢の強い冷感、そして筋肉痛、むくみがあり、夏季に体の重だるさと

膨張感、軽度の熱感があるとのこと。さらに口内粘り感と軽度の苦み感、軽度呑酸ともたれ、疲れると胸焼け、月経前の顔面浮腫があるとのことでした。

161cm、66kg、やや小太り。弦脈で、舌は淡紅色、舌尖は紅色、白膩苔があります。そこで薏苡仁湯エキス剤を投与したところ、背部痛としびれ、下肢の冷感・筋肉痛は軽快し、肩こりも軽度となりました。

病態ですが、結論的には湿証が著明な寒湿証の痺証で、さらに弱い熱証がみられます。すなわち、むくみ体質、下肢や月経前顔面浮腫、白膩苔は体に余分な水分がたまった湿証の症状と考えられます。夏の重だるい膨張感もこの湿証のためでしょう。冷え症体質、下肢の著明な冷感とは体が冷えた寒証と考えられます。つまり虚証体質であったために自然現象の寒さと湿気に対する抵抗力が失われ、気血の巡りが失調して痺証となったと考えられます。主訴である背部の疼痛と痺れ、さらに強い肩こり、下肢筋肉痛はこの寒さと湿気、つまり寒湿のために引き起こされたと考えられます。

この方はこれだけでなく、体が熱をもった軽い熱証の症状もみられます。すなわち、夏季軽度熱感、呑酸、胸焼け、舌尖紅色は熱による症状、また口の粘り感や軽度の口の苦みは湿気と熱による症状と考えられます。このように、熱証とはほてりのような感覚的なものだけではないことに注意が必要です。

以上のように、寒さと湿気症状に加えて軽い熱証があり、また背部と肩という限局的症状があるところより、薏苡仁湯が有効であったと考えられました。

以上で終わらせていただきます。